

人付き合いの特有性を描いた映像表現

壁のない町

人間空間デザインコース 2011045 鹿内ひかる

2023年12月11日提出

要旨

私は0歳から18歳まで北海道仁木町で生活していた。中学までは地元の学校に通い、その後小樽市の高校と札幌市立大学に進学する過程の中で、自身が属するコミュニティの変化に伴う人付き合いの違いを実感してきた。仁木町での生活では住民がプライベートな情報を共有し合い、互いに助け合っていたが、人口10万人以上の小樽市の高校に進学すると、仁木町で培った人付き合いの方法がトラブルの原因となり、新たな人間関係の構築で困難に直面した。私は、仁木町ではフレンドリーなイメージを持たれていたが、実際には、中学までの9年間共に育った仲間以外の人間関係構築の経験がなかった。高校時代、友人とのトラブルが噂で学校内に広まった。自身の行動が批判される中で、都市部と田舎のコミュニティでの価値観の違いに気づき、人付き合いに対する考えを見直した。この経験から、今回の映画制作を通して、都市部と仁木町の人付き合いについての理解を深めたいと考えた。

本制作では「学校」というメディアを介して私が感じた、都市と仁木町のコミュニケーションの「特有性」を、映画を通して表現し、自分自身の理解を深めることが目的である。制作を通して、仁木町と他の都市の人付き合いの方法や価値観について改めて見つめ直し、自分が今後、新たなコミュニティに属した際にも、円滑なコミュニケーションを図れるようにしていきたい。また、映画を視聴した人にも自分自身の人付き合いに対する考えを巡らせてもらいたいと考える。

制作の初めに、作品構成の着想を得るために、仁木町民への事前インタビュー、小説「島は僕らと」・映画「DOG VILLE」の閲覧、自己回想法を行った。これらを通して都市部と仁木町の噂の広がり方として「(都市部)一つのコミュニティ内で広まる噂」か「一つの学校や職場を超えた町内全体で広まる噂」かの違いがあるとわかった。また仁木町では噂が日常化していると考え、これらをテーマに映画を制作していくことにした。

次に、「都市部の一つのコミュニティ内で広まる噂」と「一つの学校や職場を超えた仁木町内全体で広まる噂」の違い、「噂が日常化している仁木町」を表現する脚本構成を検討した。視聴した人には自分自身の人付き合いに対する考えを巡らせてもらいたい。映画に登場する主人公が自分を省みるストーリーにし、主人公に視聴者自身の経験や想いを重ねることで、視聴者自身も自分自身の人付き合いについて顧みることができると考え、「昔、田舎で暮らしていたけれど、現在、都会に住んでいる大学生が記憶喪失して田舎に戻ってくる話」という案に決定した。

さらに制作した脚本をもとに撮影のためのキャストティングや演技演出、撮影場所の選定を行った。キャストティングは、なるべく役者本人の普段のキャラクターや振る舞いが、役のキャラクターや話し方に似ている人を起用した。キャストティング・撮影場所の選定については、自分の作品について積極的に他者に話す・噂を回してもらうという私自身の行動と、私の周りの人々の温かい支援があつて得られたご縁が多かった。

編集段階ではメッセージ性の強いシーンをより効果的に見せるための音楽手法として対位法を用いた。映像から受ける印象（不気味）と音楽（ポップ）から受ける印象がミスマッチな組み合わせにすることで、異様な雰囲気を出し出すことができた。カット割についても、主人公の心情の変化をわかりやすいように表情アップを多く用いた。そうすることで視聴者に自分自身を重ねてもらうことが狙いである。

札幌市と仁木町にて制作した映画の上映会と座談会を行った。上映会を行う上で、噂を使った集客方法を行った。さらに上映会にて来場者に回答してもらったアンケートの分析や、上映後の座談会の話を通して、都市部と仁木町の人付き合いに関する考察をした。田舎から都市部に移り住んだ際の人付き合いの難しさも感じつつ、反対に都市部から田舎に戻ってきた時の人付き合いに必要な配慮についても気づくことができた。

第1章 はじめに

- 1.1 背景
- 1.2 目的
- 1.3 本論文の構成と制作手法

第2章 仁木町を客観的・主観的に理解する

- 2.1 仁木町民への事前インタビュー
- 2.2 小説「島は僕らと」から地方暮らしについて考える
- 2.3 映画「DOG VILLE」から町の結束感と透明性の表現の検討
- 2.4 自己回想法の実施
- 2.5 仁木町と都市部の人付き合いの違いについて考える

第3章 脚本を制作する

- 3.1 脚本の構想を考える
- 3.2 あらすじ
 - 3.2.1 ある日、つばめが交通事故に遭い、中学から事故までの記憶を失う
 - 3.2.2 記憶を取り戻すためにアカゲラ中学校時代のクラス会に参加する
 - 3.2.3 つばめの高校と中学の過去を知らされる
 - 3.2.4 つばめは自分の過去とアカゲラ町の人付き合いに衝撃を受ける
 - 3.2.5 かおるの同僚が、つばめの記憶を取り戻すために協力してくれる
 - 3.2.6 つばめと初対面の人がつばめの良い噂を教えてくれる
 - 3.2.7 つばめは少しずつ町と過去の自分を受け入れていく
- 3.3 アカゲラ町とはどのような町か
- 3.4 ハヤブサ市とはどのような町か
- 3.5 アカゲラ町の人について
- 3.6 朝日つばめという人物について
- 3.7 つばめの幼馴染について
- 3.8 つばめの高校時代について

第4章 撮影する

4.1 キャストを集める

4.2 撮影場所の選定

第5章 編集する

5.1 幼なじみの善意を悪意に表現する手法の工夫 - 対位法 -

5.2 つばめの心情変化を描写する

第6章 上映会と座談会の開催

6.1 人集めの方法を人伝いで行う挑戦

6.1.1 札幌市の場合

6.1.2 仁木町の場合

6.2 上映会と座談会で得られた視聴者の見解

6.2.1 上映会でのアンケート調査

6.2.2 アンケートの分析

6.2.2.1 KH Coder によるテキスト分析

6.2.2.2 人付き合いに対する地域ごとの価値観の分析

6.2.3.1 座談会 札幌開催の座談会からみえてきたこと

6.2.3.2 座談会 仁木開催の座談会からみえてきたこと

第7章 制作の振り返り

7.1 制作に関する反省点

7.2 人付き合いに関する考察

第8章 おわりに

8.1 謝辞

第1章 はじめに

1.1 背景

私が生まれ育った町は人口約3000人の北海道仁木町である。農業を主要産業とし、さくらんぼやぶどうなどの果樹、トマト、近年はワイナリーの運営に力を入れている。私自身は0歳から18歳まで仁木町で生活していた。中学までは地元の学校に通い、小樽市の高校に進学し、そして札幌市立大学で学ぶ中で、自身が属するコミュニティの変化に伴う、人付き合いの違いを実感してきた。

仁木町の住民は、町民の進学先や家庭環境など、多岐にわたるプライベートな情報を共有しあい、お互いに助け合っている。町民は、他の町民の情報を脳内でプロファイリングし、必要な時にその情報を活用したり共有したりしている。このため、外部から見れば「なぜあなたがその情報を知っているのか」という疑問が生まれるようなことも度々あるが、仁木町ではこれが日常的で、他の住民が自分のことを知っていることは自然なこととされている。私自身、仁木町で、町民とのみ接点を持っていた中学時代までは、その関係性に一切の疑問を抱かずに生きてきた。

しかし人口10万人以上の人口を持つ小樽市の高校に進学すると、新たな人間関係の構築で、トラブルに巻き込まれた。原因は、仁木町で培った人付き合いの方法が私に染み込んでいたことではないかと考えた。

私は、仁木町ではどんな人とでも仲良くできるフレンドリーなイメージを持たれており、私自身も自分は周りのイメージ通りの人間であると思い込んでいた。しかし、小学校・中学校の9年間、物心ついた時には、既に一緒にいた仲間の中で育った私は、全く自分のことを知らない人たちが集まっている環境の中で、人間関係を構築した経験がなかった。

高校に進学した私は、初対面の人と仲良くなるために共通の話題が必要だと感じた。入学当初は、様々な地域の異なる中学出身者が一つの高校に集まるため、対面・SNSに関わらず、共通の話題として共通の知人について話すことが多かった。

しかし、友人Aの恋人とのコミュニケーションや、その人としていた共通の知人に関する話題が、友人Aとのトラブルに発展し、噂が広まり、学校に行けなくなる事態となった。

当時の私は自身の行動が批判されるほどのものだとは思っておらず、人との仲良くなり方が分からなくなった。その後、都市部と田舎のコミュニティに属してきた人々では、人付き合いに対する価値観が根本的に異なるのではないかと考え直した。

この経験から、今回の制作を通して、都市部と仁木町の人付き合いについての理解を深

めたいと考えた。

1.2 目的

本制作では「学校」というメディアを介して私が感じた、都市と仁木町のコミュニケーションの「特有性」を、映画を通して表現し、自分自身の理解を深めることが目的である。制作を通して、仁木町と他の都市の人付き合いの方法や価値観について改めて見つめ直し、自分が今後、新たなコミュニティに属した際にも、円滑なコミュニケーションを図れるようにしていきたい。また、映画を視聴した人にも自分自身の人付き合いに対する考えを巡らせてもらいたいと考える。現実世界では見落としがちでも、映像に映すことで気づくこともある。映画の視聴者の、都市部と仁木町それぞれの人付き合いに対する新たな視点は、私自身がそれらへの理解を深めることに繋がると考えた。

1.3 本論文の構成と制作手法

本論文では、仁木町・小樽市・札幌市での日常生活および学校での人付き合いを通じて得た都市と仁木町のコミュニケーションの特有性に焦点を当て、映画の制作および上映会・座談会の実施について述べる。第1章では、私が育った仁木町の特徴を紹介し、人付き合いに焦点を当てた研究の背景と目的について説明する。

第2章では、私が18歳まで過ごした仁木町を客観的および主観的に再評価するための手法とその成果について論じる。仁木町民への事前インタビューや地方の人付き合いをテーマにした小説や映画の参照を通じて、新たな気づきを得つつ、自身の過去を振り返るプロセスを明らかにする。

第3章では、映画の脚本構成に焦点を当て、制作過程と脚本の工夫について詳細に説明する。映画に未登場の物語の設定にも触れ、映画の裏側に迫る。

第4章では、撮影に至るまでのキャスト選定やロケ地確保のプロセスについて詳述する。人伝いで獲得した出演者やロケ地にまつわるエピソードを通じて、撮影までの工夫を明らかにする。

第5章では、映画編集における工夫や巨匠・黒澤明が用いた対位法について論じる。主人公の心情変化の表現に関する手法も述べ、映画に共感・没入させる技術に焦点を当てる。

第6章では、映画完成後に開催した上映会のアンケート・座談会での映画に対する反応を元に、人付き合いに対する考察を行っている。アンケートの記述欄はテキストマイニン

グソフト・KH Coder を用いて回答の言葉を抽出し、分析を行った。選択式の問いは相関関係を、グラフを用いて考察している。座談会は議事録を参照し、札幌開催・仁木開催を比較してそれぞれの対話形式の特徴や内容について深掘りしている。

第 7 章では、本制作の反省と、制作を通して人付き合いに関して得た気づきを述べている。

第 8 章では、まとめと後書きについて述べる。

第2章 仁木町を客観的・主観的に理解する

第1章では、私自身が都市部と仁木町の人付き合いをテーマに作品制作を行うきっかけとなった私の高校時代までの背景を説明した。また、映画を通して都市部と仁木町の人付き合いに関する自分自身の理解を深め、映画の視聴者にも各々の人付き合いを振り返ってもらいたいという考えと、制作・評価のために行った手段について述べた。第2章では映画制作を行う上で、作品構成の着想を得るために仁木町民への事前インタビュー、小説「島は僕らと」・映画「DOG VILLE」の閲覧、自己回想法を行った。これらを通して、仁木町や地方暮らしの人付き合いについての考察を行う。

2.1 仁木町民への事前インタビュー

はじめに、自身以外の仁木町民の視点を知り、作品の着想を得ることを目的として、2022年11月頃、仁木町でのインタビュー取材を行った。

インタビュー取材については今まで自分が関わったことのない人物属性を国籍・年齢・職業などから抽出し、「取材したい住民像」を考えた。これによって、これまで自分の主観的な見方で見ていた仁木町を、より客観的に再評価でき、同時に知らなかった仁木町の新しい側面を発見できると考えたからである。その後、「自分が関わったことのない人物属性」のインタビュー相手として、仁木町民7名を対象者として選出した。

- ・ 果樹農家 (70代)
- ・ トマト・果樹農家 (50代)
- ・ トマト・果樹農家 (70代)
- ・ 農園に勤める海外の技能実習生 (20代)
- ・ 子育て世帯の父親 (30代)
- ・ 一人暮らしの若者 (20代)
- ・ 一人暮らしの高齢者 (70代)

対象者は、仁木町というコミュニティの中に存在する、更に小さい（職場や親族の学校関係、住んでいる地区など）複数のコミュニティにそれぞれ立場や役割を持っている。一つ一つのコミュニティを構成する町民が複雑に関係し合うため、町全体での繋がりが生まれる。

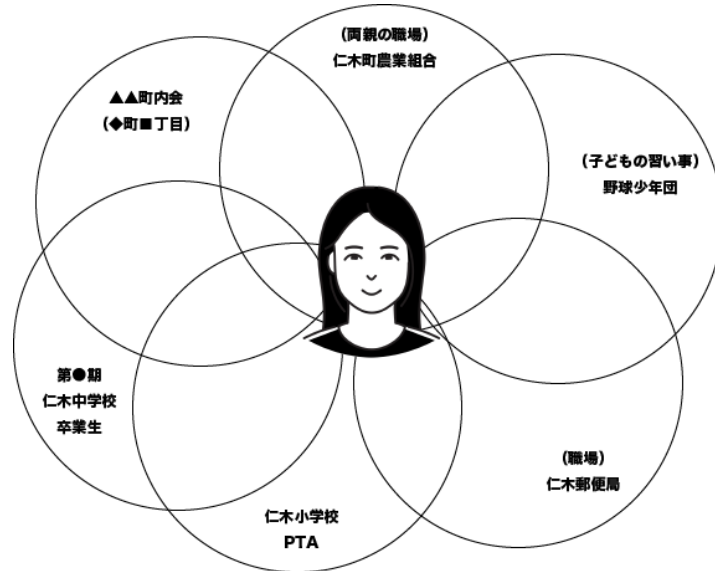


図1 一人が所属している町内のコミュニティの例

図1のそれぞれの円は、一つの小さなコミュニティを指し、中心の女性が所属しているコミュニティを表している。女性は自分が属している円と同じ円（コミュニティ）に属する人の存在をほとんど知っている。町民の中には、この女性と同じく「▲▲町内会と仁木小学校PTAに属している人」など、女性と複数の同じ円（コミュニティ）を共有している人も多い。そのため町の住民たちは共通の知人となり得る存在が自然と多くなる。

特に印象に残っている話の一つに事前インタビューの対象者の1人、一人暮らしの若者（20代）の職場・仁木町役場でのお話がある。役場の来所者の中には、役場の誰もが自分のことを知っていると思ひ込み、名乗らない人もいて困惑すると話していた。対象者の若者は仁木町に来てまもなく、仁木町内で所属しているコミュニティの数も限られている。それまでその来所者と共通のコミュニティに属していなければ、来所者を知らなくて当然である。しかし、町民は町の中に、強い繋がりや情報のネットワークを持っており、誰もが何気なくお互いを知っている状態が「当たり前」とされていると考えた。そのため来所者自身は、仁木町役場の中では、自分がよく知られていると思ひ込みやすくなる。

7名へのインタビューを通して仁木町の人付き合いについてだけでなく、仁木町の未来

に対するインタビュー相手それぞれの考え方、農業を持続していくためのビジョン、海外技能実習生たちの仁木町への想いなど、自分だけでは知り得なかった仁木町の側面を考えることができた。

人付き合いの側面でいうと、仁木町で農業を始めるために仁木町の外から引っ越してくる人々・新規就農者に対する意見もばらばらであった。インタビューを通して、私は今まで「新規就農者」をひとまとまりにイメージしていた部分があったと反省した。新規就農者の性格や価値観も人それぞれであり、同じように仁木町民にも多様なタイプがいて、各々、価値観や性格が合う人もいれば合わない人もいる。新規就農者に対する「新規就農者は地元住民と馴染合わない」という偏見やステレオタイプが私含め、地域の中でもあるのではないかと考えた。実際に新規就農者と関わっている方のお話を通して、新しく仁木町に引っ越して来た人に対して、迎え入れようという町全体の雰囲気は足りていないのではないかと考えた。町の中から外に出た時の人付き合いも難しいが、ずっと町の中にいる人たちにとっては、町の外から来た人との人付き合いも難しいものなのかもしれないと感じた。

2.2 小説「島は僕らと」から地方暮らしについて考える

仁木町民への事前インタビューを通して、仁木町の地域の特性を描いた作品を作ることが漠然と思い描くようになった。そこで地域の特性を描いた作品の一つとして、小説「島はぼくらと」（著者：辻村深月／出版：講談社）を読んだ。小説の舞台は瀬戸内海の小さな島、冨島である。島の子どもたちはいつか本土に渡る。フェリーで本土の学校に通う4人の高校生たちのヒューマンストーリーである。

本作を通して、札幌暮らしで忘れかけていた、仁木町での空気感を思い出した。噂話と悪口が紙一重の状態が島社会に存在する感覚や、個人情報筒抜け感から、中学・高校時代の自分の置かれていた状況と重ね合わせて読むことができた。

本作から仁木町で生活していた当時の自分をモデルに、作品を制作していくことの着想を得た。そこで、より仁木で生活していた頃の状況や自身の気持ちを理解することが必要だと考えた。

2.3 映画「DOG VILLE」から町の結束感と透明性の表現の検討

もう一つ、地域の特性を描いた作品として2003年にデンマークで製作された映画「DOG VILLE」を視聴した。この映画は大恐慌時代のロッキー山脈の廃れた鉱山町ドッグヴィルを

舞台とし、撮影方法が特徴的な作品である。全編、1つのスタジオの床に白いペンキの枠線と何の建物かの説明の文字のみを描いて、建物の一部をセットに配しただけの舞台で撮影されている。そのため俳優が演じている家の、周りで起こっていることが視聴者には丸見えになっている。町の情報伝達における透明性などが視覚的に表現されていると考える。

内容としても、町民たちの複雑な人間関係、エゴや欲が絡み合い、「噂の独り歩き」が描かれ、町の中の歪んだ結束感も垣間見えるものとなっている。

はじめは線が引かれただけの町の撮影セットに違和感を感じたが、町民たちのリアルな感情や関係の描写に、大胆な演出を普通と感じさせる力があつた。卒業制作においても「噂の独り歩き」の描写を扱うことを考え、情報の伝達を視覚化する手法として参考にしていきたいと考えた。

2.4 自己回想法の実施

次に実際に仁木町内での「噂」の意味を模索するために、仁木町で生活していた頃の状況や自身の気持ちを整理することを考えた。そのために以下の方法を実施した。

- 中学時代の文集を読む
- 小・中学時代の友人から当時の話を聞く
- 高校時代の友人と高校のあつた小樽市を巡る
- SNSを遡り高校時代の投稿を閲覧する

自分自身の記録や友人との回想の中で、自分の属するコミュニティが仁木町にしかなかった中学時代、小樽市にコミュニティが広がった高校時代とでは人とのコミュニケーションの図り方を意識的に変える必要があつたことがわかつた。また、高校時代には、その移行が上手くできていなかったと考えた。図2のように、高校1年生の時、友人Aの恋人Bと知り合った際、私と恋人Bの共通の話題である友人Aの話を、悪意なく恋人Bとしていた。この行為自体が友人Aの誤解を招き、意図せずトラブルに発展したことがきっかけで、新たな人間関係をどのように築けば良いのかわからなくなった。仁木町では互いの情報を共有することで関係が構築されていたが、その行為自体を非難される状況に陥っていた。この当時、私はただ恋人Bと日常会話をしていただけ（の感覚であつた）にも関わらず、クラスで浮いた存在になるまで非難されていたのかわからなかつた。しかしおそらくAにとって私の行為はプライベートに踏み込みすぎたものであつた。

この経験をベースに田舎と都会のコミュニケーションの測り方、ひいては噂によるコミ

コミュニケーションについて考察していく。

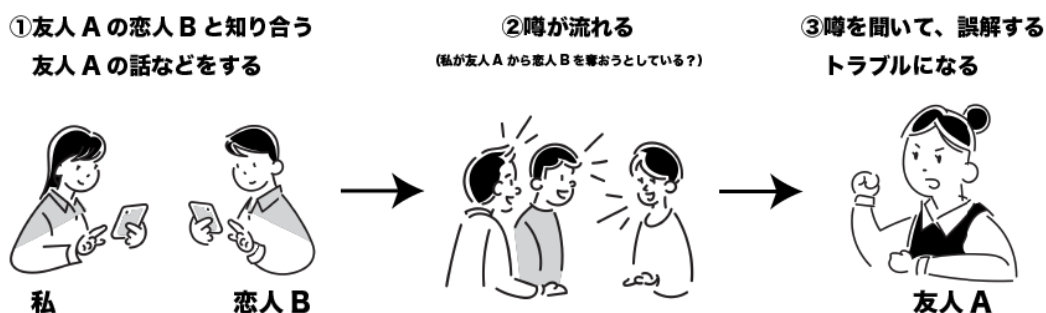


図2 高校時代のトラブル

2.5 仁木町と都市部の人付き合いの違いについて考える

自己回想法を通して、会話の場にはいない人について共通の話題として話すことは田舎、都会問わずよくあることだと考えた。噂の広がりに関して田舎と都会での違いを小・中学の友人と考察した結果、①都会では噂話が学校内で収まるものの、田舎では学校を超えたより広い範囲で広まることと、②田舎は噂が広まったとしても立場が危ぶまれるなど深刻化しないことの二つがあげられた。原因として、2つの要素が考えられる。一つは田舎では職業の選択の幅が狭まることである。もう一つは小・中学校の規模が小さく、ほぼ全ての児童や生徒、その保護者が互いに互いを認識していることである。つまり、限られたコミュニティが複数あり、それぞれのコミュニティの構成員が複雑に重なり合っているため噂が広まりやすく、それ自体に町民が慣れているのである。(図3)

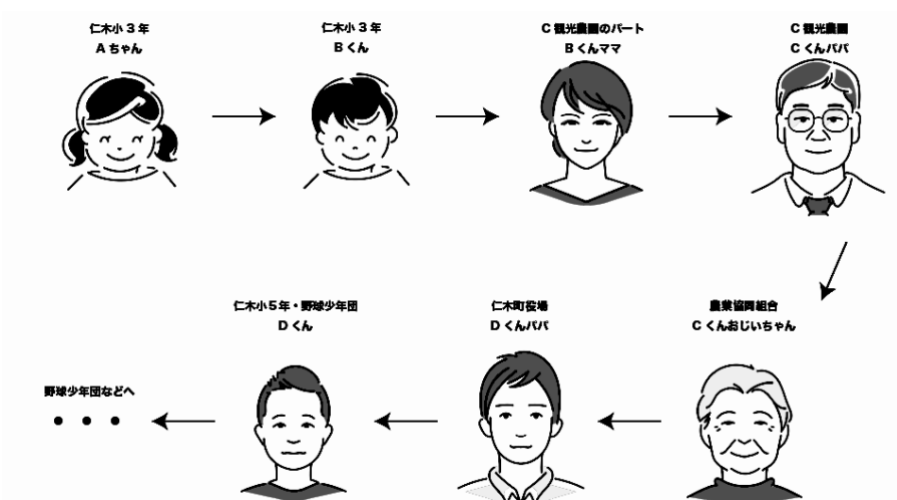


図3 仁木町内での情報共有の例

次章では、第2章で行った仁木町や田舎の人付き合いに関する考察を元に、「都市部の一つのコミュニティ内で広まる噂」と「一つの学校や職場を超えた仁木町内全体で広まる噂」の違い、「噂が日常化している仁木町」を描いたストーリー構成について述べている。

第3章 脚本を制作する

第2章では映画制作を行う上で、作品構成の着想を得るために行った、仁木町民への事前インタビュー、小説「島は僕らと」・映画「DOG VILLE」の閲覧、自己回想法を通して、仁木町や地方暮らしの人付き合いについての考察を行った。第3章では、第2章で得た着想を踏まえて制作した、「都市部の一つのコミュニティ内で広まる噂」と「一つの学校や職場を超えた仁木町内全体で広まる噂」の違い、「噂が日常化している仁木町」を描いたストーリー構成について述べる。

3.1 脚本の構想を考える

脚本は「都市部の一つのコミュニティ内で広まる噂」と「一つの学校や職場を超えた仁木町内全体で広まる噂」の違い、「噂が日常化している仁木町」を描いたストーリー構成を主軸に考えた。

当初、比較検討したストーリー案は下記の通りである。

- 出身はど田舎で、大人になり都市部で生活していた人が、タイムスリップして過去を追体験する話
- 地方に引っ越してきた子のストーリー
- 地方で育った人が、成長するに従って都会で暮らしていたが、数十年ぶりに実家に戻ってきたストーリー
- 都会育ちの人が面白おかしく田舎を感じるストーリー
- ずっと先の未来を描き、おばあちゃんが過去の田舎を振り返るストーリー
- 昔、田舎で暮らしていたけれど、現在、都会に住んでいる大学生が記憶喪失して田舎に戻ってくる話

視聴した人には自分自身の人付き合いに対する考えを巡らせてもらいたい。映画に登場する主人公が自分を省みるストーリーにし、主人公に視聴者自身の経験や想いを重ねることで、視聴者自身も自分自身の人付き合いについて顧みることができると考え、1番最後の案に決定した。

次に記憶喪失によって記憶を失ってしまった中学・高校時代に、主人公が噂に関するトラブルを起こしていた設定を考えた。そこで主人公が広めてしまった噂として、当初は下記のようなアイデアを考えていた。

高校時代：クラスメイトの同性愛について

中学時代：親友の『親友の親が実親ではない』という秘密

しかし、構想段階で札幌市立大学デザイン学部石田ゼミ・横溝ゼミとの合同ゼミを行った際に、広めた噂の話題があまりにも重過ぎて、「噂の広まり」よりも「噂の内容の重さ」が際立ち過ぎてしまい、私の映画の本来の目的である、視聴者に自分の人付き合いを省みてもらうという点が不透明になってしまうのではないかとアドバイスをいただいた。

そこで噂の内容を変更し、脚本制作に取り掛かった。

3.2 あらすじ

「都市部の一つのコミュニティ内で広まる噂」と「一つの学校や職場を超えた仁木町内全体で広まる噂」の違い、「噂が日常化している仁木町」を表現するために、最終的には下記の設定とストーリーの展開を制作した。

【設定】

主人公・朝日つばめ（21）は両親の離婚が原因で中学から高校までを母の地元・アカゲラ町で過ごす。中学はアカゲラ町にある中学校、高校は大都市・ハヤブサ市の高校に通っていた。大学生になったつばめはハヤブサ市で一人暮らしをしていた。

【ストーリーの展開】

- ① ある日、つばめが交通事故に遭い、中学から事故までの記憶を失う。
- ② 記憶を取り戻すためにアカゲラ中学校時代のクラス会に参加する。
- ③ 高校時代につばめが起こしたトラブルを知る。

（高校のクラスメイトの恋愛に関する話題を憶測で友人に話してしまったことが高校内で噂となり、1組のカップルを破局させてしまう。）

- ④ 中学時代の過去も明らかになる。

（親友が高校浪人するという秘密を、母親に話してしまったことがきっかけで町中に広めてしまう。）

- ⑤ つばめは自分の過去とアカゲラ町の人付き合いに衝撃を受ける。
- ⑥ つばめの母・かおるの同僚が、つばめの記憶を取り戻すために協力してくれる。
- ⑦ アカゲラ郵便局の人（つばめとは初対面）がつばめの良い噂を教えてくれる。
- ⑧ つばめは少しずつ町と過去の自分を受け入れていく。

3.2.1 ある日、つばめが交通事故に遭い、中学から事故までの記憶を失う

つばめが事故に遭ったことを伝える冒頭の場面は、つばめが病院を退院する前に、主治医の荒川先生の指示を受けるシーンから始まる。当初、このシーンの前には、病室のシーンからスタートさせ、つばめが事故で意識がなかった状況から目覚める描写を入れる予定だった。しかし、そのためには病室のセットを手配する必要があり、またカットも増える。病室は看護学部の施設を借りられないかと考えたが、出演者のスケジュールや撮影の進行を考えこのシーンはカットすることにした。このシーンで最も重要なことは視聴者につばめが事故に遭い、記憶を失っているという現状の情報を伝えること、つばめの失望感を伝えることであるため、上記のシーンは必要ないと判断した。

主治医の荒川先生とのシーン（図4）・Scene1では時計の秒針の音を使っている。これは編集の時点で、つばめ自身の感覚が本来の21歳ではなく、12歳になったことで時間感覚が遅く感じるようになったと考え、時間の流れを視聴者に感じてもらう手法として思いついた。



図4 Scene1の主治医との面談

退院後の駐車場のシーン（図5）・Scene2ではもともと、脚本のト書きには『つばめ、車から数メートル離れたところでぼーっと空を見上げる。』と記載していたが、撮影当日、ロケ地である本学の桑園キャンパスの駐車場から列車が見えることに気づき、空を見上げる描写から列車を見つめる演出に変更した。列車を見つめることで、より、つばめが記憶を失う前の記憶にある病院の外の世界と、現在の姿が違うことに絶望しているような表現ができると考えた。本作では定期的な列車が登場する。列車が登場するところでつばめの変化を表現している。空を見つめる当初の演出から、列車を見つめる演出に変更したことで、背景に列車が映るシーン（かおるが茫然としているつばめに声を掛けるカットなど）で全て同じ方向の列車にならないとシーンが繋がらないので、毎シーン、札幌市から仁木町方面に行く列車を撮影するために何度も列車待ちを

しながら撮影した。

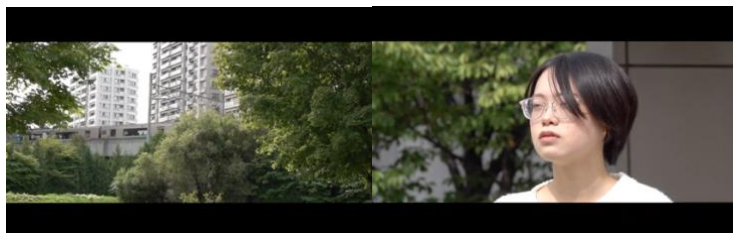


図5 Scene2の列車を見つめ、呆然としているつばめ

つばめが退院して、自宅に帰ってきたシーン・Scene3 (図6) では、翌日につばめがアカゲラ中学時代のクラス会に行く話をしている。このシーンの最後には元々、下記のモノローグが入る予定であった。

M つばめ「明日、地元の友達が集まるクラス会がある。

記憶を取り戻すヒントになるかもしれないから行ってみることにした。」

しかし、編集段階でつばめ役の主演・寧さんと相談した結果、つばめはわざわざこの言葉を心の中で言うような人物像ではないのではないかと考え、セリフをカットすることになった。



図6 Scene3の翌日のクラス会について話している朝日親子

結果として、このセリフがなくなったことで、説明的な印象は受けなくなったが、このクラス会が「アカゲラ町にある」中学校でつばめと共に通っていたクラスメイトたちとの再会」ということがわかりにくくなってしまった面もあった。

3.2.2 記憶を取り戻すためにアカゲラ中学校時代のクラス会に参加する

Scene4 からは、アカゲラ町の人々が多く登場し、様々な噂を話す。そこで、撮影方法や編集手法に拘り、「噂が日常化している仁木町」を表現することに挑戦した。人から聞いた噂話は、良い話も、悪い話も、基本的に口元から下だけのカットで統一した。「今、話している内容は噂話である」ということを強調するために行った。

Scene4 (図7) は爽やかな音楽に合わせて、つばめの中学時代の友人たちがつばめを待ち侘びている様子からスタートする。打って変わって、Scene5 でつばめが友人たちと合流すると、音楽は迫り来るようなポップな曲調、映像は異様に彩度が上がる。友人たちは口元から下だけが画面に映されている。友人たちは、噂で聞いたつばめの今の状況に関する質問を次々につばめに投げかける。幼馴染たちの心配の言葉やつばめが記憶を取り戻すための噂話を、ポップな曲調・不気味な色味の映像とカット割というミスマッチな組み合わせを敢えて使うことで、噂話による状況の不気味さが強調される。この効果により、「噂が日常化している仁木町」の人にとっても異質なものであることを感じられるようにした。

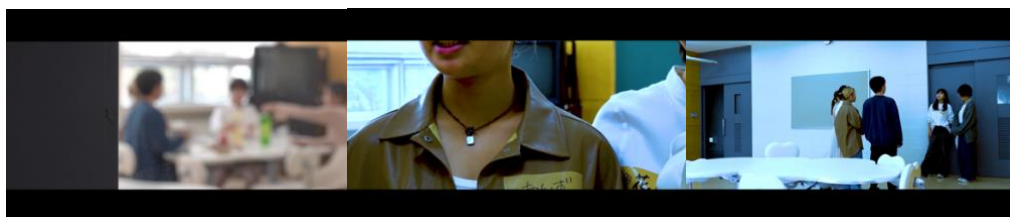


図7 Scene4・5のクラス会でつばめと再会した中学時代の友人たち

3.2.3 つばめの高校と中学の過去を知らされる

「③高校時代につばめが起こしたトラブルを知る（高校のクラスメイトの恋愛に関する話題を憶測で友人に話してしまったことが高校内で噂となり、1組のカップルを破局させてしまう。）」場面・Scene6 (図8) と「④中学時代の過去も明らかになる。（親友が高校浪人するという秘密を、母親に話してしまったことがきっかけで町中に広めてしまう）」場面・Scene13 (図9) では、「噂を伝える画角手法・口元カット」と「回想映像」の両方を組み合わせることで、視聴者が状況をわかるようにした。



図 8 Scene6 高校でつばめが流してしまった噂の広がりを表す場面



図 9 Scene13 町内で中学時代のつばめが流してしまった噂の広がりを表す場面

他の噂話のシーンではつばめの知らない人の話が繰り返り広げられていて、つばめにとって話の内容や状況がわかりにくい、上記二つの噂話は自分に関する事で、つばめの理解が追いつき、動揺している様子をわかりやすくしたいと考えた。そのために視聴者にも噂の内容を理解してもらいたい部分にのみ、回想シーンを用いることにした。また、どちらも同じ手法を用いることで、噂が広がるという状況は都市も地方も変わらないということを表現した。

図 8 の高校時代の噂話のシーンではつばめの驚きや失望、落胆などの表情と、思い出話に花を咲かせる楽しそうな周りの雰囲気を重ね合わせることで、アカゲラ町で噂が日常化していることを際立たせた。(図 10)



図 10 Scene12 の高校時代の噂話について聞いた後のつばめ

また、図 9 の中学時代の噂話のシーンでは、図 8 のシーン以上につばめの表情カットを多く入れ、気持ちが沈んでいくつばめ的心情をわかりやすくした。(図 11)

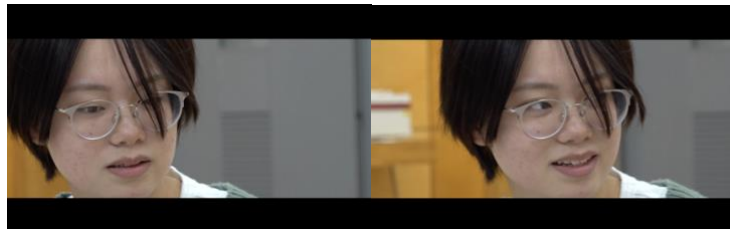


図 11 Scene17 の中学時代の噂話について聞いた後のつばめ

この二つの噂話を聞いたつばめ的心情をわかりやすくすることで都市部の視聴者に向けては「噂が日常化している仁木町」を、仁木町の視聴者に向けては噂の日常化が特有のものであることを表現した。

3.2.4 つばめは自分の過去とアカゲラ町の人付き合いに衝撃を受ける

つばめがクラス会から帰宅する場面・Scene19 では、悲しい曲調の音楽を使用し、心配する母・かおると心情を眩くように吐露するつばめが印象に残るように描いた。つばめが心の内を吐露するシーンは当初、

つばめ「でも自分が、口が軽すぎる人間になってしまっていたことはわかった」

かおる「えー？」

というセリフの流れになっていたが、現場の出演者やスタッフとつばめの人物像について改めて、深め、つばめはかおるにも聞こえないほど小さな声で眩くのではないかと考え、

かおるの反応をなくした。また、下記のように、自信なさげに語尾が消えていくようなセリフに変更した。

つばめ「でも…自分が、口が軽すぎる人間になっちゃってたんだなあ…って…。」

こうすることで、過去の自分に対する、つばめの不安や恐怖を表現した。

3.2.5 かおるの同僚が、つばめの記憶を取り戻すために協力してくれる

かおるの職場（アカゲラ町役場）の同僚・坂井がつばめの作文が載った文集を持ってくる Scene20 では、Scene19 で表現されている落胆したつばめがアカゲラ町の温かさに触れるため、雰囲気ガラッと変えた。そのために、映像もより淡く、鮮やかに加工し、音楽も爽やかなものに変化させた。

3.2.6 つばめと初対面の人がつばめの良い噂を教えてくれる

Scene22 は最初、仁木駅前での屋外ロケを計画していた。このシーンでは、つばめがアカゲラ町や過去の自分に対して否定的だった印象が少しずつ変わっていく希望に満ち瞬間が描かれている。しかし、実際の撮影日にはかなりの雨が降っていた。そのため、傘を差しての撮影は難しく、また雨のせいで印象が暗くなる可能性を考え、急遽仁木駅の中で撮影を行うことになった。

元々の脚本では、郵便局員・中村が仕事に向かう途中で、朝日親子とアカゲラ駅前でお会い予定だった。しかし、状況に合わせて内容を変更し、中村の設定もアカゲラ町の住民ではなく、ハヤブサ市方面から列車で通勤しているというものに変更した。映画では、通勤中の中村がアカゲラ駅で列車を降りた時に、駅の中で朝日親子と出会うシーンに変更した。

このシーンでも中村がつばめに関する噂話をするため、口元だけのカットを使用している。つばめと初対面の中村が、つばめの高校時代のトラブルに関して噂を伝えているシーンでは、つばめの暗い表情を演出し、トラブルを乗り越えるためにアカゲラ町の人々に助けられてつばめが好かれていた噂を伝えているシーンでは、つばめの段々と明るくなる表情を演出した。そうすることで、つばめ的心情の変化がわかりやすくなるように描いている。

3.2.7 つばめは少しずつ町と過去の自分を受け入れていく

Scene23 は、つばめが列車の中からアカゲラ町の車窓を眺め、心情を吐露するモノローグが特徴的なシーンである。このモノローグは当初、脚本に書いていた下記のセリフから、出演者・スタッフで相談しながら、時間をかけてセリフを改良していった。

【初版】

M つばめ「この町の人には世間話が好きで、みんなが何でも知っていて、すぐに色々な人に広まるけど、そんな環境に私は助けられてきた。」

【第2版】

M つばめ「この町は噂話に溢れていて、みんなが何でも知っていて、すぐに色々な人に広まるけど、そんな環境に私は助けられてきた。」

【第3版】

M つばめ「この町はまるで鳥籠だった。この街には噂話が溢れていて、みんなが何でも知っていて、すぐに色々な人に広まるけど、そんな環境に私は助けられてきた。」

【第4版】

M つばめ「この町に溢れる噂は、人と人をつないでいる。そんな町に私は救われてきた。」

【最終版】

M つばめ「この町はまるで鳥籠だった。この町に溢れる噂は、人と人をつないでいる。そんな町に私は救われてきたんだ。」

町の名前や主人公の名前に鳥の名前を用いるなど、「鳥」が映画のキーワードであったため「鳥籠」という言葉を入れた。「鳥籠」には遊郭を例える意味もあり、「遊女が閉じ込められている空間」と悪く捉えがちな言葉でもある。それでも、希望に満ち溢れた映画のラストシーンに、アカゲラ町の比喩として、「鳥籠」という閉ざされた空間を表す言葉を入れることで、映画に対する引っ掛かりを残して終わりたいと考えた。悪い印象を与え過ぎてし

まうという意見もあったが、つばめの微笑みや映像の明るさ、モノローグの声質で重くなり過ぎないように気をつけ、最終的には「鳥籠」という言葉を用いることにした。

3.3 アカゲラ町とはどのような町か

アカゲラ町は仁木町をモデルにした架空の田舎町である。主人公・朝日つばめの母親である朝日かおるの故郷。つばめが12歳の時、両親の離婚を理由に、かおると二人でハヤブサ市から引っ越してきた。つばめはその後、18歳までの6年間、アカゲラ町で過ごしている。

アカゲラ町は人口が2000人規模の小さな町である。主要産業は農業で、人口の半分以上が農業関係者である。高齢化の進む町で、アカゲラ町内で働く若い世代の人の中には近隣の地域から通っている人もいる。アカゲラ町内の人々は町内の様々なコミュニティにおける活動を通じて互いに関係し合っていることから、一人当たりが認知している町民の人数は多い。しかしコミュニティが複雑に重なり合っているため、どれだけ互いを認知し合っているかは、町民自身も把握しきることができない。

次にアカゲラ町という町の名前について考える。町の名前をアカゲラにした理由は仁木町の町の鳥がアカゲラであること、アカゲラが留鳥であることの二つである。

留鳥：季節による移動をせず一年中、同一地域にとどまる鳥。

(引用 新明解国語辞典第7版)

つばめという主人公の名前と、ハヤブサ市という都市の名前は、いずれも渡り鳥の名前である。一方、仁木町がモデルの架空の田舎町については、アカゲラという留鳥の名前とすることで、そこに在り続ける地元・故郷を表現した。

3.4 ハヤブサ市とはどのような町か

ハヤブサ市は小樽市と札幌市をモデルにした架空の地方都市である。人口が50万人規模で、主人公・朝日つばめの通っていた下野高校と幼馴染・楡野夏鈴が通っていた上川高校が存在する。どちらの高校も、全校生徒は1000人程度である。

ハヤブサ市はアカゲラ町と対照的に、程よく都会の町をイメージしている。高校の生徒は自分の学年の半分以上の人の顔と名前が一致していない。他の学年においては部活動など

の関わりがない限り全くわからない。また、様々な地域から生徒が集まっているため、学校というコミュニティ以外で互いに関係し合っている人もほぼいない。

そのため、映画では、アカゲラ町と違い、噂が広められても学校という狭いコミュニティの中でしか広まらないということを表現した。

3.5 アカゲラの人について

「アカゲラの人」はアカゲラ町に長く住んでいる、もしくはアカゲラ町で長く勤めている人を表しているが、そのほかに本論ではアカゲラ町で過ごす人特有の特徴を指す時にも用いている。本作品における「アカゲラの人」の特徴とは、①それぞれの基準の中で人に伝えても害がないと考える他人の情報をその他の人と共有することでコミュニケーションを図る、②知り得た情報で自分のできることをしてあげようとする、の二つを想定している。

3.6 朝日つばめという人物について

朝日つばめは0歳から12歳の2月まで両親と3人で、ハヤブサ市で暮らしていた。つばめの小学校卒業、両親の離婚を機に12歳の3月に母・かおるの実家があるアカゲラ町に引っ越してきた。アカゲラ町では中学から高校までの6年間を過ごしていた。引っ越してきた当初は新しい学校や環境に戸惑いながらも、町の温かさに触れ、次第に自分も「アカゲラの人」となっていく。大学からハヤブサ市で一人暮らしを始めたつばめは順風満帆の大学生活を送っていた。しかし、ある時、交通事故で中学時代から事故までの記憶を無くす。

映画ではアカゲラ町での経験の記憶がほぼ無くなってしまったつばめの様々な心情の変化を表情で描いている。冒頭の病院から外の世界に出た時の呆然とした表情、クラス会での動揺した泳ぐ目、ラストの希望に満ちた眼差しなどの演出を施した。

3.2.7 つばめの幼馴染について

中学のクラス会のシーンには主人公・朝日つばめの中学時代のクラスメイトで、幼馴染である夏鈴、由実、あんず、花、宙の5名の友人たちが登場する。裏設定で、このクラス会に参加できなかった同級生が3名いるため、アカゲラ中学校のつばめの学年は全8名の小さなクラスである。

夏鈴と由実は中学時代から大学生になるまでずっと固定の仲良しである。町の人たちからも“さんこいち”のイメージがある。また、あんずと花もペアで仲が良い。

夏鈴は明るくて、積極的な女の子である。一喜一憂が激しい。物理的にも人間関係的にも声が大きい。その反面、人一倍、人の表情の変化を読み取り、周りの空気のバランスを考えるとところもある。アカゲラ生まれアカゲラ育ちの生粋の「アカゲラの人」である。田舎町独特の噂が広まりやすいことに関しても、腹は立つことはあっても、ある程度受け入れている節がある。

由実は明るいけれど夏鈴よりは控えめで優しい女の子である。穏やかなタイプだが、伝えなければならない情報や素敵な話は必ず共有するタイプである。わかりにくい由実もかなり生粋の「アカゲラの人」と言える。本作では、クラス会のシーンで幼馴染の話についていけないつばめに補足情報を伝えるなどのサポートを行う場面や、回想シーンで噂話を広げる側の一人になってしまう場面で、由実が間違いなく「アカゲラの人」の特徴を持ち合わせていることを表現している。

あんずはストレートな物言いが特徴的な女の子である。決して悪意があるわけではなく、事故にあったつばめを明るく受け入れてあげよう、つばめの記憶を取り戻すキープポイントになりそうなことを教えてあげようという善意からつばめに関する過去の話題をたくさんする。回りくどく伝える方が、かえってつばめを混乱させるのではないかと本人は考えている。

花は共感性が強く、人に流されてしまうタイプの女の子である。つばめの過去を教えてあげようとしているシーンでは一緒になって当時の状況を伝える。知らず知らずのうちに、人のことを話していることに気づかない。

宙は物知りで様々なことへの興味関心が強いので、町のことも1番詳しい。また誰よりも記憶力もよく、つばめの過去に起こったことを確実な情報として伝える。クラスみんなのツッコミ役、影のまとめ役のような面もある。

3.2.8 つばめの高校時代について

主人公・朝日つばめの高校時代の回想シーンは2.4で示した私自身の実体験から着想を得ている。アカゲラ中学でアカゲラの人と密に関わったつばめは、自分自身もアカゲラの人へと染まり切る。15歳の春、つばめはハヤブサ市にある下野高校へと進学する。下野高校には様々な地域の中学校から生徒が進学する。回想シーンに登場する、愛衣・航太・鈴

木・一希の4名もアカゲラ町ではない別の地域から進学してきた生徒である。生徒数が1学年1クラス10名前後のアカゲラ中学では、当然同級生は全員顔見知りであったが、1学年8クラス全320名の下野高校では、そもそも存在を知らない同級生も多い。回想シーンに出てくる航太は、つばめが存在を知らない同級生の1人だった。クラスメイトの愛衣と航太が交際中であることなど知る由もなく、愛衣と鈴木が会話している様子を見たつばめは、単純に自身の主観で二人が交際に発展しそうな恋愛関係にあると考えてしまった。つばめの中では「素敵な話題」と捉え、その憶測をつばめと同じく下野高校に通っていた、別のクラスの幼馴染・由実伝えてしまった。愛衣と航太の交際関係を知らなかった由実も、愛衣と鈴木が恋愛関係であるという憶測をつばめと同様に「素敵な話題」と捉えた。その幸せ（素敵な話題）の共有を一希にしてしまった。しかし、一希は愛衣と航太の交際関係を知っていたため、つばめと愛衣が「素敵」だと捉えていた話題を、「ゴシップ」と「友人への心配事」と捉えた。案の定、一希から話を聞かされた航太は愛衣に対して怒りを覚え、喧嘩になり、破局する。そして愛衣は、誰が「愛衣と鈴木に恋愛関係がある」と航太に吹き込んだのかを探り、つばめに辿り着く。仕返しにつばめを悪く言い始める。

以上が脚本の構想段階で考えていた、本作品の設定とストーリーである。次章では制作した脚本をもとに行った撮影のためのキャスト集めや演技演出、撮影場所の選定について述べる。

第4章 撮影する

第3章では、「都市部の一つのコミュニティ内で広まる噂」と「一つの学校や職場を超えた仁木町内全体で広まる噂」の違い、「噂が日常化している仁木町」を描いたストーリー構成について述べた。第4章では制作した脚本をもとに行った撮影のためのキャストティングや演技演出、撮影場所の選定について説明している。

撮影は、計7日間で行い、2023年9月20日に始まり、10月25日に終えた。キャスト16名・スタッフ10名で、札幌市や仁木町で行った。

4.1 キャストを集める

撮影するにあたって、まずキャストティングを考えた。本作品のキャストは全16名である。本作は予算の関係ではほぼ完全ボランティアで役をお願いする必要があった。キャストは基本的には役のイメージに合う人に、私が一人一人、声をかけていった。私の知り合いだけではなく、本制作を手伝って頂いた制作スタッフの後輩にも事前に脚本を渡し、役のイメージに合う人を探してもらった。主人公・朝日つばめ役は、後輩スタッフから紹介してもらった、私自身が今まで一度も関わったことのない人物に決定した。母親・朝日かおる役、かおるの同僚・坂井役、つばめの幼馴染・宙（そら）役も人伝いで紹介して頂いた方をキャストに起用したが、どちらもイメージ通りに演じていただくことができた。自分の作品について積極的に他者に話す・噂を回してもらおうという私自身の行動と、私の周りの人々の温かい支援があつて得られた御縁だと感じた。

一箇所に複数の役が集まる中学のクラス会のシーンや高校時代の回想シーン等では、同日に複数名のキャストの日程を合わせなければいけないため、撮影場所やキャストの日程調整が難しかった。かなりタイトなスケジュールで撮影を進めていたが、キャストが決まってすぐに日程調整を行ったことで、全員の日程を合わせることができた。しかし、どうしても日程が合わず、変更したキャストもいた。

本作の最も重要な点は「噂話をどれだけ悪意なく自然に話せるか」である。演技経験のない人がほとんどなため、キャストを選ぶ際は、なるべく役者本人の普段のキャラクターや振る舞いが、役のキャラクターや話し方に似ている人を起用した。また、脚本を一言一句、正しく読むことはあまり重視しないように演出指導した。話す内容は変えないが、役者本人の普段の喋り口調に近くなるように、現場で相談しながら台詞を柔軟に変えた。そうすることで、役者により自然に演じてもらうことができた。

4.2 撮影場所の選定

次に撮影場所の選定を行った。本編に登場する場所はアカゲラ町の町並み、病院の面談室、病院の駐車場、主人公・朝日つばめの実家、アカゲラ中学校の教室、下野高校の教室・体育館、アカゲラ町役場、スーパーの駐車場、アカゲラ駅、JRの中まで多岐に渡る。

つばめの実家は、つばめが中学生になるときに戻ったつばめの母・かおるの実家でもあるため、古風なおうちをイメージした。雑誌などにも掲載されているお宅を無償でお貸しいただくことができた。

その他のシーンは基本的には札幌市立大学の学内で撮影した。病院の駐車場のシーンは本学の看護学部の桑園キャンパスが市立札幌病院に隣接していることを利用し、本学のキャンパスと病棟を合わせて撮影し、架空の総合病院を演出した。

アカゲラ町の町並みは北海道仁木町内で撮影した。アカゲラ町も農業が主要産業であるため、仁木町内の自然豊かな風景を感じてもらえる映像を挟んだ。アカゲラ町ののどかな雰囲気を演出した。

以上が映画撮影のために行ったキャスティングや演技演出、撮影場所の選定について述べた。次章では撮影後の編集段階で行った、メッセージ性の強いシーンをより効果的に見せるための音楽手法とカット割について述べる。

第5章 編集する

第4章では映画撮影のためのキャスティングや演技演出、撮影場所の選定について説明した。第5章では撮影後の編集段階で行った、メッセージ性の強いシーンをより効果的に見せるための音楽手法と、カット割について述べている。

Adobe Premiere Pro・Adobe After Effects・Cap Cutのソフトを使用し、編集作業を行った。

5.1 幼なじみの善意を悪意として表現する手法の工夫 - 対位法 -

編集作業の中で工夫した一つに、音楽がある。音楽は日本映画の代表的な映画音楽手法とされている劇伴を利用した手法を用いた。劇伴は映画に合わせて音楽を作っていく手法ではなく、あらかじめ劇伴作家が作った「悲しいシーンの曲」といった雰囲気合う曲を、シーンに当てはめていく手法である。本作は「げきばん！フリー」という、プロが制作した著作権フリーの劇伴が提供されているサイトの音楽を主に使用した。つばめの心情をより効果的に伝える劇伴を選択し、演出した。

特に工夫した点として、主人公・朝日つばめとアカゲラ中学時代のクラスメイトが出会うシーンの音楽表現に、対位法という手法を用いた。対位法の説明は下記の通りである。

音は映像の付随的なものではなく、まして、映像は音の付随的なものでもない。「音」と「映像」というものを、二つの全く異なる単位として考え、それらを同時進行させるのである。そこに、音だけの時の、あるいは映像だけの時の効果とはちがった、音と映像が掛合わされた全く新しい効果が生まれるという考えなのである。

(引用：西村雄一郎「黒澤明 音と映像」p63)

例えば、悲劇的なシーンであえて楽しい音楽を扱うことで、悲劇的なシーンが悲しみを共感させるだけに留まらず、見た人に狂気を感じさせるシーンになる。

本作品においても、つばめが中学時代のクラスメイトに再会するシーンで対位法の手法を用いた。直前の中学校の外景や教室で待機しているクラスメイトたちの様子のシーンで流れている音楽は穏やかで再会を待ち侘びているような劇伴を使用している。打って変わって、つばめが教室のドアを開けると、映像の色味と音楽がガラリと変わる。映像の色味は明度を落とし、彩度をあげ、毒々しさを演出する。クラスメイトたちは、つばめへの心

配から、つばめに対して多くの質問を投げかける。その表情は口元から下だけが写されているが、つばめをまた受け入れようという気持ちが溢れていて、つばめに笑顔を向けている。しかし怒涛の質問攻めに、つばめは困惑の表情を浮かべる。その映像と台詞に、再会を表す穏やかな音楽でも、つばめの感情を表す悲観的な音楽でもなく、ポップで明るい音楽をつけることで状況の不気味さ、違和感を表現した。

5.2 つばめの心情変化を描写する

映画では主人公・朝日つばめの心情変化を細かく描写するために、つばめの表情カットが多く使われている。

冒頭、病院の面談室や駐車場でシーンでは虚な目をしたつばめを象徴的に描いた。自分の知らない過去や変わってしまった現在、戻るかどうかもわからない記憶、全てに不安を抱えたつばめはつい、ぼーっと何かを考えてしまう。(Scene1)

病院の駐車場や帰宅後の母・かおるとの会話(Scene2・3)では時折、明るい表情が見える。事故後のつばめにとってかおるは、唯一、記憶のある12歳の自分も知っている存在であり、心を許して話すことのできる人であることを表現した。

アカゲラ中学のクラスメイトと再会するシーンでは、クラスメイトたちがつばめに質問攻めしたり、つばめの知らない過去を容赦なく突きつけたりしてくる。つばめはその言動に対して戸惑いの表情を浮かべる。特にこのシーンでは、つばめ以外の登場人物は、顔全体が写されていないため、つばめの表情がより印象に残るようなカット割りとなっている。(Scene5)

その後のクラスメイトたちとのクラス会ではあたたかい話から自分の過去に起こしたトラブルまで様々な話題が登場する。あたたかい話では再会シーンよりも緊張が溶け、周りの友人たちの話をにこやかに聞くつばめの表情が特徴的である。その反面、高校時代、中学時代に自分が起こしてしまったトラブルを聞くシーンでは、目を泳がせるつばめが特徴的である。困惑、絶望、自分や周りへの不信感などを表現した。(Scene6~17)

つばめがクラス会から帰宅後、母・かおるの同僚である坂井がつばめの実家を訪ねてくる。誰もわからない坂井という男にも自分が事故に遭ったことについて知られていることに気まずさを感じるものの、つばめが記憶を取り戻すために何かしてあげたいという坂井のおせっかいにあたたかさを感じる。クラス会で落ち込んでいたつばめもアカゲラの人の優しさに触れ、少しだけ穏やかな表情に変わる。(Scene20)

次の日、ハヤブサ市に行く途中、アカゲラ駅で郵便局員・中村に出会う。つばめは、初対面の中村にも事故のこと、さらには自分の高校時代のトラブルまで知られていたことを知って暗い表情を浮かべる。しかし、中村がつばめに対する良い噂話を教えてくれたことでつばめは少しずつ視線をあげ、笑みが溢れるようになる。過去の自分自身への失望感が少し拭われ、アカゲラ町の噂話が自分を救ってくれていたことも知り、町に対しても前向きに感じられるようになったつばめの心情を表現した。(Scene22)

ラストシーンでは電車の中で外の風景を見つめるつばめが写っている。つばめの表情は最初のシーンと同じく、ぼーとしたものであった。モノローグが挟まり、つばめの虚な表情から少し穏やかな表情に変化する。このシーンでは自分への失望、町への不信感が大きかったつばめの心情が、様々な場面での自分に対する町の人々の対応から、少し変化している様子を表している。(Scene23)

このようなわかりやすいつばめの表情に、視聴者に自分自身を重ねてもらうことが狙いである。

第5章では撮影後の編集段階で行った、メッセージ性の強いシーンをより効果的に見せるための音楽手法と、カット割について述べた。次章では札幌市と仁木町で完成した映画の上映会を行う上での集客方法について、実際の上映会にて来場者に回答してもらったアンケートの分析や、上映後の座談会的话题を通して、都市部と仁木町の人付き合いに関する考察を行っていく。

第6章 上映会と座談会の開催

第5章ではメッセージ性の強いシーンをより効果的に見せるための音楽手法と、カット割などの編集作業について述べた。第6章ではまず、札幌市と仁木町で行った、完成した映画の上映会を行う上で、噂を使った集客方法についてその過程と考察を述べる。その後、上映会にて来場者に回答してもらったアンケートの分析や、上映後の座談会的话题を通して、都市部と仁木町の人付き合いに関する考察を行う。

作品の完成後に、本作品の上映会と座談会を2023年11月2日（木）に札幌市立大学芸術の森キャンパス、2023年11月5日（日）に仁木町民センター交流ホールにて行った。

大学の開催では学内外の方、34名にお集まり頂き、座談会には5名の方にご参加頂いた。仁木町での開催では仁木町民や仁木町近辺在住の方、36名にお集まり頂き、座談会には7名の方にご参加頂いた。

上映後は両日程、全員に同じアンケートにご回答頂いた後、事前にご連絡いただいた方限定で座談会を行った。

6.1 人集めの方法を人伝いで行う挑戦

今回、座談会に参加して頂く人の集め方を噂の広がりと同じ手法で集める実験をした。

まず私が一人（Aさん）に座談会に参加して欲しい旨を伝え、Aさんに同じように座談会に参加して頂ける方（Bさん）を私に紹介して頂く。さらにBさんも同じように座談会に参加して頂ける方（Cさん）を私に紹介して頂く。（図12）

02 参加方法

皆さんのお友達・お知り合いをご招待していただけませんか！

本作中には噂話のエピソードが登場します。そこで、今回の上映会では以下のような手法を用いて、映画を見てくださる方を10名程度、募集したいと考えています。

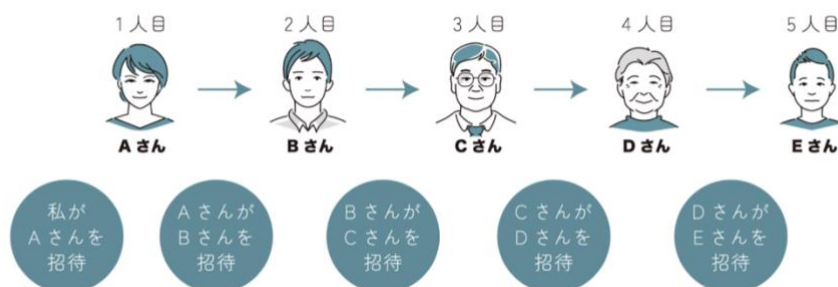


図12 協力者に仕組みを伝える制作したwebサイトより

このような手法を用いて、私が最初に招待する参加者として各会場2名ずつに私が声をかけ、10名を定員に座談会を開催することにした。

この手法では、「札幌市開催と仁木町開催で、実際にどれほど上手く話が伝わって紹介制が進んでいくのか、いかないのかに地域ごとの違いが生まれるか。」また、「上手くいかなかった場合はどうして上手くいかなかったのか」について知ることを目的としている。

6.1.1 札幌市の場合

札幌市開催の方では芸術の森キャンパス近辺の札幌市南区にお住まいの方、2名にお声かけした。被験者Aは札幌市南区南沢地区で飲食業をされている中年の女性である。被験者Bは札幌市南区常磐地区で水産業をされている子育て世代の女性である。2023年10月1日(日)にお二人に対面で概要をお伝えし、2023年10月9日(月)に詳細と専用サイトをメッセージでお送りした。

しかし、そこから1週間程度経ってもお二人から反応を得られず、再度ご連絡したところ、被験者Aからは「(知り合いに子育て世帯が多く)夜の上映会に参加できる世帯がない」、被験者Bからは「チェーンメールのように友達に声をかけるのに抵抗感や違和感がある」というお答えを頂いた。両名が上映会・座談会ともに不参加となり、被験者Bが紹介してくださった方で私との共通の知り合いのみが参加してくださる結果となった。

そのため、私自身が個人的に1名1名をお呼びする形で5名を集客し、座談会を開催した。

6.1.2 仁木町の場合

仁木町開催の方では仁木町内にお住まいの方、2名にお声かけした。被験者Cは仁木町内にお住まいの高齢女性である。被験者Dは仁木町内にお住まいで、中高生のお子さんがある教員の中年女性である。被験者Cには2023年10月9日(月)に対面で、被験者Dには2023年10月15日(日)に電話で概要をお伝えし、双方に詳細と専用サイトをメッセージでお送りした。

被験者Cは私と関わりのない高齢女性を2名紹介してくださった。しかし、その先から別の人の紹介はして頂けなかった。(上映会当日、1名が体調不良で不参加。)紹介してくださった2名は私と直接的に関係があるわけではなかったが、私の両親とは職場等で多少、関係があるようであった。

被験者Dは私の関わりのある被験者Dの高校生の娘(被験者E)の紹介であった。その後、被験者Eは私と関わりのある女子高校生(被験者F)を紹介した。被験者DとEとFは更に、私全く関わりのない隣町・余市町在住の男子高校生(EとFの高校のクラスメイト)とその母親を紹介した。

この結果、仁木町では完全な紹介の連続までは行かなかったが、札幌市と比較するとある程度、スムーズに集客が進んだ。私自身は2名以外に声をかけることなく、座談会に7名を集客することができた。

6.2 上映会と座談会で得られた視聴者の見解

6.2.1 上映会でのアンケート調査

上映会後に行ったアンケートは映画に関して視聴者が感じる事、人付き合いについて考える事への理解を深める事を目的に行った。

アンケート調査の項目は下記の通りである。

- I. 住んだことのある地域と、それぞれの地域で何年間暮らしたかをご記入ください。
- II. ご自身の年齢に丸をつけてください。<9歳以下・10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代・90代以上>
- III. 映画の感想を自由にご記入ください。
- IV. 気になったシーンがあればご記入ください。
- V. 本作の人間関係について感じたことがあればご記入ください。
- VI. アカゲラ町についてはどんな印象を受けましたか。
- VII. 気づいたら自分があまりよく知らない人に自分のことを知られていた経験はありますか。あったらその経験談(どんな人に知られていたのか、どのように伝わったのかなど)を教えてください。
- VIII. 自分のことを話すことに対して抵抗はありますか。当てはまる回答に丸をつけてください。<かなり抵抗がある・やや抵抗がある・あまり抵抗はない・全く抵抗はない>
- IX. 誰にだったら自分のプライベートなことを話せますか。当てはまる回答に丸をつけてください。<保護者・兄弟姉妹・友達(リアルで会う人)・ネット上の友達・同僚・近所の人・行きつけのお店の人・その他()>
- X. (1)話せる人と話せない人の違い(2)話す内容の違いなどがあれば教えてください。

上記のアンケートを札幌市・仁木町の両方の上映会の後、参加者全員に回答して頂いた。
続いて、アンケートの分析を行う。

6.2.2 アンケートの分析

札幌開催でのアンケート調査では 34 名分の有効回答を得ることができた。回答者の年齢の内訳は 10 代 6 名・20 代 19 名・30 代 3 名・40 代 3 名・50 代 2 名・1 名である。アンケートの回答には約 30 分程度かけて回答していただいた。2 名以外は全員、本編を全て視聴後に回答いただいた。(2 名は途中入場)

6.2.2.1 KH Coder によるテキスト分析

アンケートの記述式の回答は計量テキスト分析やテキストマイニングのためのソフトウェアである KH Coder を用いて分析した。KH Coder ではアンケートの回答が記述式である、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹの問いで視聴者がどのような回答をしているのか、回答の傾向を見ることを目的とした。これらの記述式の回答の中に頻出している語を KH Coder で抽出した抽出語リストや、回答に含まれる単語間の共通性を見出して図で表現する共起ネットワークを用いて、回答を分析した。アンケート内で使われていることの多い言葉を抽出語リストや共起ネットワークから知り、よりアンケートの回答を深く理解するために使用した。

Ⅲの映画の感想を答える記述式の回答に関して、抽出語リスト(表 1)を眺めると、頻出語の一つに「自分」という言葉が用いられている。アンケートの各回答を見ると、「自分」という言葉が 4 つの異なる意味で使用されていることがわかった。

- ① 劇中の主人公・朝日つばめを指す場合。
- ② 回答者自身を指す場合。
- ③ つばめと回答者自身の両方を指す場合。
- ④ 一般論として自分自身を指す場合。

この中で 2 番目に使用例が多かったのが②の回答者自身を指す場合であった。この使用例では映画を觀賞し、自分自身の生活や人間関係を省みたといった感想が多かった。また、他にもつばめに感情移入したという感想もあり、本研究の目的でもあった「映像を視聴した人に自分自身の人付き合いに対する考えを巡らせてもらう」ことが成功した例だと捉える。

IVの気になったシーンを記述式で答える問いに関しては、クラス会・同窓会といった抽出語が頻出していた。その中で、下記の回答があった。(表2)

「噂話になると“誰がどんな表情で話しているのか”ということはあまり重要な情報ではないと感じ、少し恐怖を感じました。」(20代・札幌開催参加者)

私自身は、その場にいない人の話をしているという状況をわかりやすくするために、噂話のシーンは全て口元だけを映すカットにした。そのため、上記のような意図を伝えようとしていたわけではなかった。しかし、自分自身の映像を通して視聴者にこのような意見を頂き、『噂を聞いている時は噂の対象となっている人に意識が向くため、話をしている人自体の印象はよっぽどな話し方ではない限り残らない』と気付かされた。

Vの本作の人間関係に関する印象を答える記述式の問いに関して、抽出語リストを見ると「心配」という言葉が目についた。(表3)

「心配」という言葉の使用例として、「小さな町だから心配してもらえるところが温かい」といったような好意的に捉える記述がある反面、

「心配しているようで記憶喪失ということに興味があるだけのような関係性」(20代・札幌開催参加者)

といった、アカゲラ町の人々からつばめに向けられている「心配」をネガティブに捉える人もいた。また他にも親や親の周囲からの人からの心配を重いと捉える回答もあり、町の人々から個人に向ける「心配」は人によって、良さにもしんどさにもなるものであることを実感した。

VIのアカゲラ町の印象について答える記述式の問いに関しては「心」という言葉を用いた回答が印象的である。(表4)「心の距離が近い」「心の温かい方」「安心」など、町に対して好意的な印象を抱いている人が「心」という言葉を使用していた。

その反面、否定的な印象の人もいる。

「中にいると、慣れるのかもしれませんが、自分はこの町では生きていけない」(30代・札幌開催参加者)

上記の記述に対して、相反した考えのような回答もあった。

「噂話が悪意があるかどうかを、自分は割り切っている」(50代・仁木開催参加者)

この二つの回答はとても対比的な考えのように感じた。上記の二つ目の回答者である仁木開催参加者の方は噂が広まることに慣れている、あるいは諦めているように感じる。しかし、上記の一つ目の回答者である札幌開催参加者の方はこの慣れ・諦めを受け入れてはい

けないという強い意志を感じた。噂に対して、両者のどちらのように捉えるかによってア
カゲラ町のような町を好意的に感じるか否定的に感じるかが決まるのではないかと考えた。

表1 アンケートの項目Ⅲ 映画の感想 抽出語リスト

抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)
思う	25	仁木	4	姿	2
人	21	表現	4	持つ	2
感じる	20	雰囲気	4	失う	2
良い	20	本当に	4	受ける	2
自分	19	たくさん	3	助ける	2
町	19	テーマ	3	助け合う	2
噂	17	意味	3	傷つける	2
記憶	14	過去	3	少ない	2
映画	13	皆さん	3	場面	2
知る	13	感じ	3	状況	2
悪い	11	環境	3	状態	2
見る	10	関わる	3	親	2
面白い	10	気	3	仁木	2
主人公	8	気持ち	3	生きる	2
話	8	形	3	喪失	2
やすい	7	最後	3	早い	2
伝わる	7	作る	3	大変	2
内容	7	身近	3	登校	2
入る	7	素晴らしい	3	描く	2
音楽	6	素敵	3	聞く	2
関係	6	難しい	3	壁	2
広まる	6	怖い	3	変化	2
作品	6	風景	3	友達	2
周り	6	面	3	良い	2
人間	6	うわさ	2	話す	2
多い	6	もう少し	2	綺麗	2
田舎	6	アカ	2	あつという	1
シーン	5	カメラ	2	あり方	1
映像	5	クラス	2	お上手	1
共感	5	ゲラ	2	きれい	1
思える	5	愛	2	さまざま	1
小さい	5	移入	2	すてき	1
情報	5	引き込む	2	すれ違う	1
地域	5	影響	2	づらい	1
部分	5	街	2	はじめ	1
コミュニテ.	4	覚える	2	ひかる	1
印象	4	学生	2	びっくり	1
演技	4	感情	2	めっちゃめち	1
改めて	4	気づく	2	よい	1
感動	4	救う	2	イメージ	1
観る	4	距離	2	エンディング	1
狭い	4	興味深い	2	カルチャー	1
考える	4	近い	2	キャスト	1
住む	4	繋がり	2	ゲーム	1
出る	4	向き合う	2	コミュニケ.	1
少し	4	好き	2	ショック	1
上手	4	広がる	2	ストーリー	1
色々	4	構成	2	スムーズ	1
心	4	今後	2	セリフ	1
人々	4	今後	2	ダメ	1

表2 アンケートの項目IV 気になったシーン 抽出語リスト

抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)
シーン	34	良い	3	たくさん	1
クラス	17	その後	2	づらい	1
人	15	アカ	2	にくい	1
自分	14	ゲラ	2	ひとつ	1
感じる	11	セリフ	2	ぼーっと	1
思う	11	一気に	2	もう少し	1
知る	11	影響	2	アップ	1
話す	11	過去	2	イメージ	1
噂	10	共感	2	カット	1
会話	9	嫌	2	コミュニケ	1
記憶	8	個人	2	サイド	1
最後	8	行く	2	ストーリー	1
話	8	思い	2	ストレート	1
印象	7	時代	2	ズーム	1
友人	7	次々	2	タイミング	1
気	6	質問	2	トーク	1
口元	6	写す	2	トラブル	1
同窓会	6	受験	2	ハッ	1
良い	6	集まる	2	バランス	1
言う	5	傷つける	2	フリ	1
広まる	5	場面	2	メンバー	1
残る	5	情報	2	ラストシー	1
伝わる	5	職場	2	リスト	1
怖い	5	色々	2	愛	1
駅	4	心	2	意図	1
口	4	心情	2	意味	1
主人公	4	辛い	2	移入	1
出る	4	前	2	違う	1
仁木	4	喪失	2	一緒	1
やすい	3	他人	2	印象深い	1
ラスト	3	知り合い	2	映る	1
悪い	3	置く	2	演技	1
映す	3	町	2	演者	1
会う	3	長い	2	演出	1
感じ	3	電車	2	温かい	1
感情	3	都市	2	音	1
顔	3	同級生	2	音響	1
見る	3	入る	2	何となく	1
言葉	3	表す	2	夏	1
高校	3	不安	2	回想	1
今	3	面白い	2	壊す	1
周り	3	流れる	2	懐かしい	1
少し	3	浪人	2	外	1
相手	3	話しかける	2	確か	1
田舎	3	あけすけ	1	学校	1
内容	3	いい	1	学生	1
悲しい	3	いや	1	楽しめる	1
表情	3	うわさ	1	感心	1
母	3	お世話	1	感性	1
友達	3	お母さん	1	間	1

表3 アンケートの項目V 本作の人間関係に関する印象 抽出語リスト

抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)
思う	34	多い	3	表現	2
人	28	大人	3	付き合い	2
感じる	21	仲	3	部分	2
関係	17	登校	3	壁	2
良い	17	登場	3	本当に	2
噂	14	聞く	3	密接	2
自分	13	うわさ	2	面	2
町	13	たくさん	2	面白い	2
人間	12	ひかる	2	優しい	2
知る	11	意味	2	良い	2
悪い	10	印象	2	あり方	1
話	9	家族	2	いろいろ	1
友人	7	学生	2	お互い	1
感じ	6	気	2	お母さん	1
地域	6	気付かす	2	さまざま	1
怖い	6	救う	2	すれ違い	1
見る	5	距離	2	それぞれ	1
色々	5	結びつく	2	ほしい	1
心配	5	結構	2	またたく間	1
都会	5	限る	2	よい	1
話す	5	好き	2	アカ	1
クラス	4	広まる	2	イオン	1
シーン	4	考える	2	イス	1
映画	4	行動	2	イメージ	1
改めて	4	作る	2	イヤ	1
言う	4	札幌	2	イヤ	1
広がる	4	時代	2	キツ	1
住む	4	自然	2	キモ	1
田舎	4	失う	2	ゲラ	1
友達	4	周囲	2	サバ	1
やすい	3	初対面	2	タイトル	1
コミュニケ-	3	少ない	2	ツバメ	1
コミュニテ-	3	常に	2	トーク	1
学校	3	親	2	パーソナリ	1
環境	3	生きる	2	パンク	1
関わる	3	生活	2	ビックリ	1
記憶	3	全て	2	プライベート	1
興味	3	素敵	2	プレ	1
近い	3	他人	2	ポジティブ	1
見える	3	大きい	2	マイナス	1
言葉	3	大学	2	モラル	1
子供	3	大変	2	ライフスタ-	1
主人公	3	伝わる	2	リアル	1
出る	3	当たり前	2	レッテル	1
小さい	3	働く	2	挨拶	1
情報	3	特に	2	悪意	1
状況	3	難しい	2	悪口	1
職場	3	日常	2	意外	1
人々	3	反面	2	意識	1
仁木	3	必要	2	違う	1

表4 アンケートの項目VI アカゲラ町の印象 抽出語リスト

抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)	抽出語	文書数 (h5)
町	29	助け合う	2	嫌	1
思う	24	情報	2	見える	1
人	21	心配	2	言う	1
良い	11	人付き合い	2	個人	1
噂	10	全て	2	固まる	1
自分	9	素敵	2	固執	1
感じる	8	知り合い	2	広い	1
関係	8	地域	2	広がる	1
広まる	8	筒抜け	2	行ける	1
印象	7	閉鎖	2	合う	1
感じ	7	明るい	2	込み	1
悪い	6	優しい	2	困る	1
知る	6	いろいろ	1	最上階	1
コミュニテ	5	おおらか	1	細かい	1
似る	5	さまざま	1	仕事	1
怖い	5	にくい	1	子	1
家族	4	のどか	1	子供	1
受ける	4	やすい	1	思いやり	1
少し	4	イヤ	1	事件	1
仁木	4	スケール	1	事故	1
多い	4	タイプ	1	事実	1
伝わる	4	デリカシー	1	事情	1
田舎	4	ネガティブ	1	自然	1
お互い	3	リアル	1	主人公	1
住む	3	挨拶	1	取り戻す	1
助ける	3	悪意	1	手伝い	1
心	3	悪気	1	周り	1
人間	3	安心	1	住民	1
都会	3	安心	1	重ねる	1
部分	3	一員	1	出す	1
良い	3	押し付ける	1	助け合え	1
話	3	温かい	1	場合	1
アカ	2	温かみ	1	色々	1
ゲラ	2	何もかも	1	色々	1
プライベート	2	過ごす	1	信頼	1
プライベート	2	会う	1	深い	1
意味	2	開放	1	親子	1
温か	2	外	1	親戚	1
街	2	割り切る	1	身内	1
関わり	2	感覚	1	進路	1
気	2	慣れる	1	人物	1
距離	2	関わる	1	仁木	1
強い	2	含める	1	性格	1
狭い	2	顔	1	生きる	1
近い	2	基準	1	生まれる	1
繋がり	2	記憶	1	昔	1
今	2	共有	1	石垣島	1
最初	2	近所	1	全体	1
思いやる	2	形	1	全面	1
出る	2	景観	1	早々	1

6.2.2.2 人付き合いに対する地域ごとの価値観の分析

VIIIの問いで尋ねた「自分のことを話すことに対する抵抗感」や、IXの問いで尋ねた「誰に対して自分のプライベートなことを話せるか」に関しては札幌開催参加者と仁木開催参加者で比較してみた。

図13を見ると、札幌・仁木両方が、全く抵抗はない・あまり抵抗はないと答えた人を合わせた割合が約5割、やや抵抗がある・かなり抵抗があると答えた割合も約5割という結果であった。

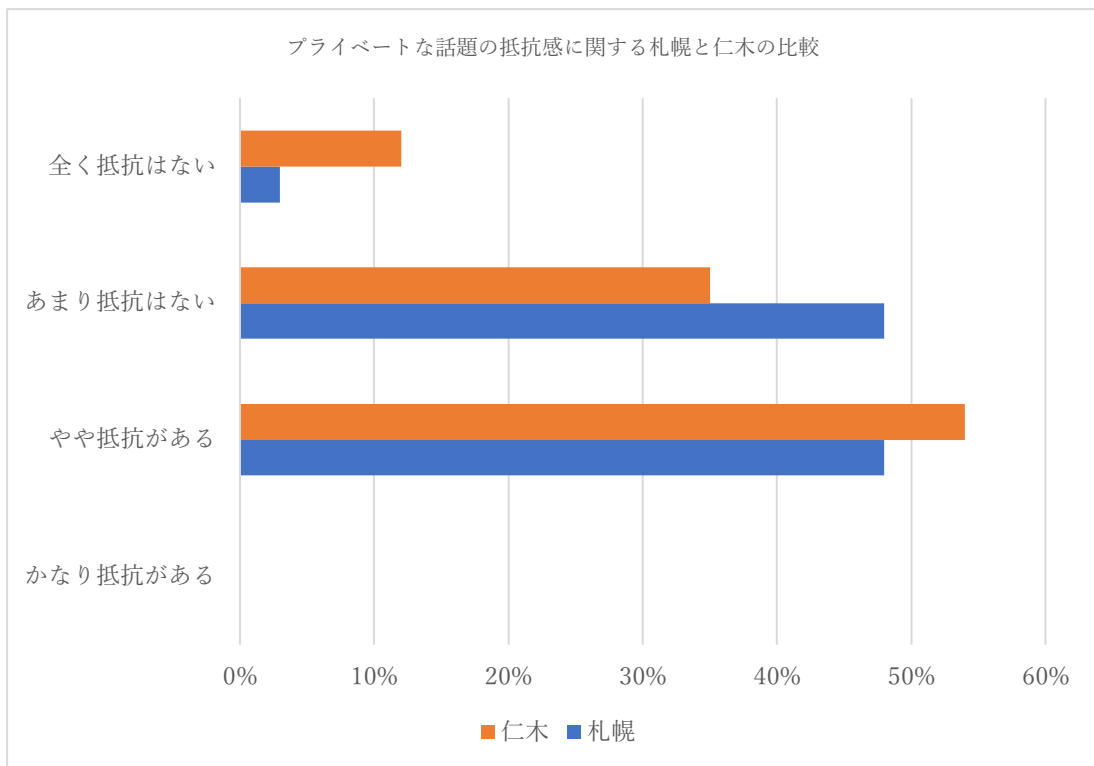


図13 プライベートな話題の抵抗感に関する札幌と仁木の回答の比較

図14より、自分のプライベートなことを話せる人の割合を見てみると、どちらも友達(リアルで会う人)が多くを占めている。特徴的であるのが、「近所の人」の選択をした人の割合が、札幌開催参加者に対して仁木開催参加者が3倍いることである。

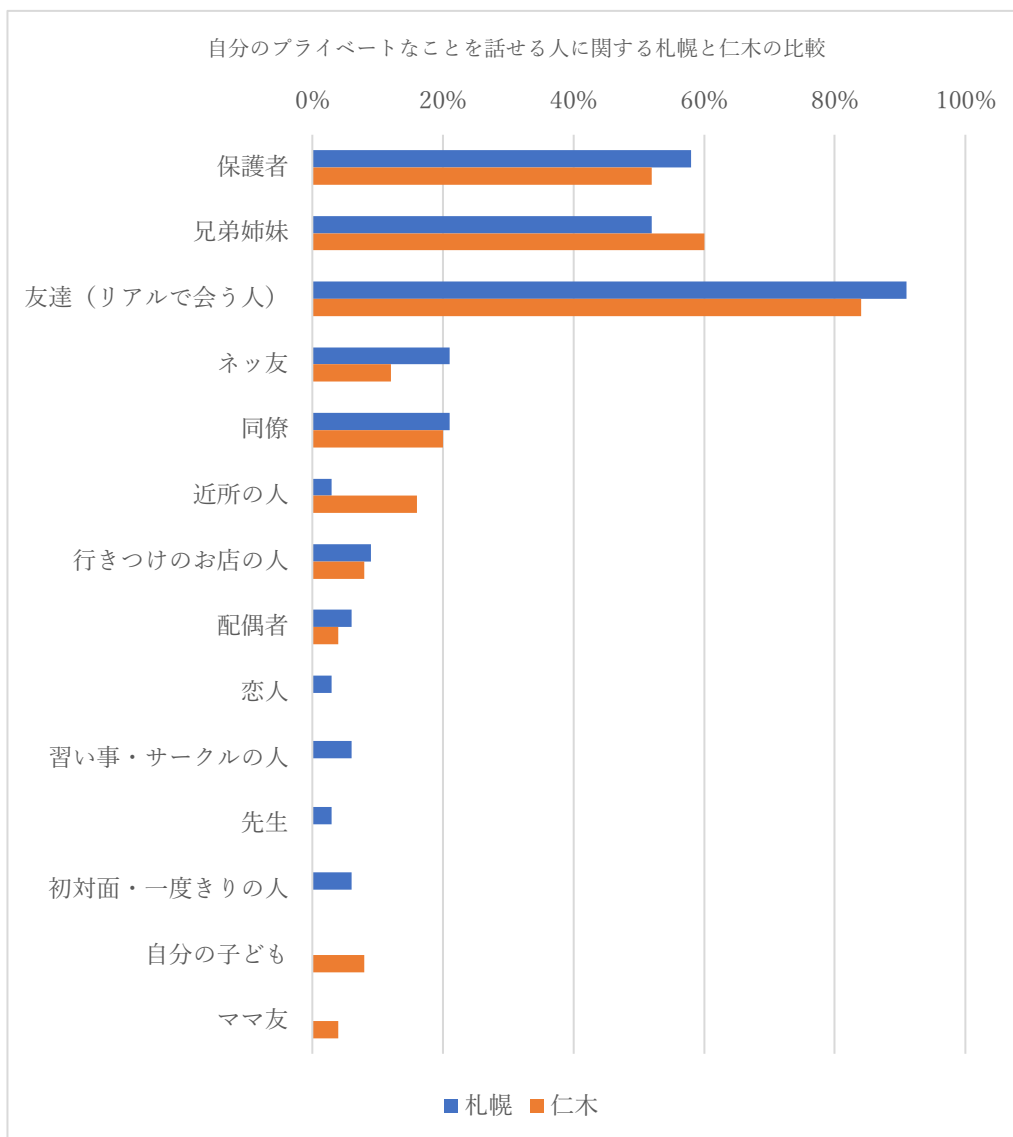


図 14 自分のプライベートなことを話せる人に関する札幌と仁木の回答の比較

この結果から、自分自身のプライベートな話をするに対する抵抗感は様々であり、地域差は生まれない。しかし、近所の人にも心を開く傾向が札幌より強いと考えた。

6.2.3.1 座談会 札幌開催の座談会からみえてきたこと

札幌市での上映会後に行った座談会は、20 時頃から約 45 分間行った。座談会の中で話す話題は、アンケート項目と同じ内容である。座談会ではそれらの項目を更に深掘りしていく形式をとった。札幌市での座談会の参加者は下記の 5 名である。

Aさん：札幌市立大学職員 40代男性（札幌市在住）

Bさん：芸術の森地区まちづくりセンターの方 70代女性（札幌市在住）

Cさん：札幌市立大学卒業生 社会人2年目 20代女性（札幌市在住）

Dさん：札幌市立大学休学中 20代女性（札幌市在住）

Eさん：札幌市立大学須之内ゼミ生 20代女性（札幌市在住）

座談会の座る位置は参加者に自由に決めてもらった。私に対して弧を描くように、他の参加者の反応も見える位置で座ってもらった。

札幌開催の座談会では私が質問すると、参加者がそれぞれ、順番に答えていった。そして、自分が質問されていない時は、他の人が質問に答えている様子を静かに聞いていて、無理に話に入らない雰囲気が特徴的だった。そのため、座談会というよりかはグループインタビューのような印象を受けた。

参加者の回答の傾向としても、映画をきっかけに想像した各々の人間関係や、噂の実体験に関するものが多かった。特に印象的だったのは学校や職場、組合など限られたコミュニティ内での噂話について話題が多かったことである。Aさんも学生時代にAさんが所属していた部活動の部員を介して、他校の全く違う部活動の人に自分のことを知られていた経験を話していた。このように比較的、噂の経路が辿りやすい、一貫したコミュニティの話が多く登場した。参加者の話す経験談には参加者が属してきたコミュニティは違っても、噂の経路がたどりやすいという意味では似たような経験談がたびたび登場していたが、私が参加者に話を振らない限りは、「●●さんが話していたように私も…」といった他の参加者に共感するようなコメントは得られなかった。

一部の参加者は札幌などの規模の大きな市だけではなく、小さな町で生活した経験もあり、小さな町で過ごしていた頃の思い出や、初めて小さな町に行った時に驚いたことを話していた。

このように話の内容はバラバラだが、映画と結びつくそれぞれの思い思いの経験をベースに、私の問いに答えていた。

6.2.3.2 座談会 仁木開催の座談会からみえてきたこと

仁木町での上映会後に行った座談会は、20時頃から約60分間行った。座談会の中で話

す話題は、札幌開催の座談会と同様に、アンケート項目と同じ内容である。座談会ではこれらの項目を更に深掘りしていく形式をとった。仁木町での座談会の参加者は下記の7名である。

Aさん：私の実家のご近所の高齢者（仁木町民）

Bさん：Aさんの友人の高齢者（仁木町民）

Cさん：40代女性教員 私の小学時代の元担任（仁木町民）

Dさん：Cさんの娘 私の出身高校の現役高校生 私の合唱団の後輩（仁木町民）

Eさん：Dさんの友人 私の出身高校の現役女子高校生 私の合唱団の後輩
（仁木町民）

Fさん：DさんとEさんの高校の同級生 私の出身高校の現役男子高校生
（余市町民）

Gさん：50代女性 養護教諭 Fさんの母親（余市町民）

座談会の座る位置は札幌開催と同様に、参加者に自由に決めてもらった。仁木町開催では大きなテーブルを用意し、全員で囲むように、他の参加者の反応も見える位置で座ってもらった。

仁木開催では札幌開催に比べて、掛け合いが多いのが特徴的な会であった。議事録を見ても、掛け合いが細かく、かなり反応が多いのがわかる。仁木開催は6.1で行った参加者集めが成功したこともあり、一部の参加者同士が親しい間柄であったことも関係するかもしれないが、完全に初対面の参加者同士の間にも頻繁に掛け合いが見られた。

私から参加者にする質問は、札幌開催と同様に、一人一人に問いかけるものであったが、全員で一つの問い・テーマを考えながら話していた。そのため、「おしゃべり」という印象を受け、私自身もそのおしゃべりに参加した。

内容としては、映画をきっかけに仁木町近辺での人付き合いについて深める話題が多かった。特に印象的だった話の一つにGさんの話がある。下記はその要約である。

余市町は仁木町より少し規模が大きくなるが、仁木町と同じように小学校、中学校と同じメンバーで進学していく。そして多くの人が高校から町外に出て、新しい仲間と出会い、

成長して、変わっていく。しかし町内では、本人がどんなに変わりたい、変わったと思っ
ていても、「小学校の時のあいつはこんなやつだった」、「中学時代はこんなやつだった」と、
既にその人に対するステレオタイプがある。そのため、就職、出産など様々なタイミング
で、ある日、地元に戻ってきたとしても、離れていた期間の背景は関係なしに、町内には
中学当時の人間関係・力関係が残っている。

この話を聞いて、私は自分自身の幼馴染を思い返して、地元を離れてイメージが変わらな
い場合と変わる場合があると考えた。

私は、仁木町の人々が私に対して持つステレオタイプを感じることもある。私に染み付い
たイメージは今も昔も変わらない。座談会に参加したAさんは生後数ヶ月の頃から私と関
係がある。今回の座談会の合間でも私がどんな子だったかを周りの参加者に話していた。

「誰にでもフランクに接していて、明るくて、それでいて真面目で、粘り強い。」私その
場にいたからか沢山のお褒めの言葉を頂いたが、高校生活、大学生活で関わった人からす
ると、そうポジティブに捉える人ばかりではないのではないかと考えていた。大人になる
につれて辛いことや不真面目なことも経験して、私的には、仁木町で過ごしていた当時の
自分に対して「そんな頃もありましたね」という感覚だが、おそらくAさんの中の私・鹿
内ひかるという人物は良くも悪くも、今もそのままなのだろう。

反対に、地元を離れてイメージが変わったと認識している人もいる。特に同世代の人は、
今はSNS（主にInstagram）で、離れていてもその人の生活、人によっては現在的人格まで
が垣間見えるため、自分の中でのその人へのイメージが更新されていく。しかし、それも
噂話と同じく、断片的で、SNS を更新しているその人と同じ場で直接的に見たり聞いたり
しているわけではない。そのためSNS で知り得た情報もあくまで「～をしているらしい」
にしかならない。SNS で知り得た情報から新たに作るイメージは憶測であり、実際に会っ
たら更に変わることもある。

他にも印象的だった話題が、「他人のプライベートを他の人に話すこと」についてである。
本作では夏鈴の中学卒業後の進路について、つばめがつばめの母親・かおるに伝えたこと
をきっかけに、まだ夏鈴自身が話せずにはいた夏鈴の母親まで話が回ってきてしまうという

シーンがあった。実際、仁木の中でもなんとなく仁木に住む子どもたちの進路先を把握している人は多い。座談会でそのことについて、仁木町民の現役高校生であるDさんとEさんに聞いてみると、知られていることが当たり前で意識したことがなかったと話していた。進路を話題にしやすい背景として、昔は合否を新聞やテレビで発表する学校もあったからではないかという話が出た。その名残で伝わってもいい情報だという認識があるかもしれない。Cさんは下記のように話している。

「噂が広まるのがわかるから、夫も役場の話とか、何か大事なこととかもちろんしないし、私の学校の個人的な話は…。何か校長先生の愚痴とかそういうのは広まってもいい話(笑) そういうのは広がってもいいわけじゃないけど、そういうような話を気軽にするけども、本当に子供の何があったのかっていうのとか、これ広まったらまずいなって話は本当に気をつけるようにしてるし。仕事柄じゃなくても時代もそうだし、どこでどう広まるかわかんないし。」

Cさんは話す内容と話してもいい人を区別しているという。その後もCさんは、「当たり前障りのない話は話しちゃう、人の進路が当たり障りがないかどうかわからないけど…」と濁しながら語っていた。それに対してGさんが他人の進路を話してしまうことに対して「みんな気になる」「悪い話だと思っていない」と話していた。

ではみんなが気になること、みんなが悪い話だと思っていないことは話していいのか。噂をする本人は悪い話だと思っていなくても、される側はどう思っているかわからないのではないかと考えた。それでも一般論的に判断して、喋ってしまうところは気をつけて配慮していかなければならない部分かもしれない。

第6章では上映会の、噂を使った集客方法について、上映会でのアンケートや座談会での話題を通して、考察を行った。札幌のような都市部では生まれも育ちも都会の人ばかりが住んでいるわけではなく、様々な地域から集まっているため、価値観や考え方にも多様性が生まれる。そのため、互いの顔色を伺いながら生活しているように思えた。仁木町は、仁木町に長く住む人の方が多く、価値観や感じることも近い傾向がある。そのため仁木町での座談会でも、お互いのコメントに共感し合い、会話が活発になったと考えた。仁木町のような田舎のコミュニティでの生活経験があるかどうかで、映画をどのように捉える

か、アカゲラ町やアカゲラ町の人々をどのように感じるかも異なる。今回は、仁木町をベースに、アカゲラ町を舞台とした作品であったが、ハヤブサ市を舞台にした物語も制作した場合、田舎の人も都会の人も私自身も、今回の映画とは違った、新たな発見を得ることができるのではないかと考えた。次章では映画制作を振り返り、制作を通じた反省点と人付き合いに関する気づきを述べる。

第7章 制作の振り返り

7.1 制作に関する反省点

今回の映画制作・上映には多くの出演者とスタッフが関わっている。その中で、方向・連絡・相談が上手くいかず、頼んでいた仕事の進行状況が把握できていなかったり、私自身のスケジュール管理が滞っていて急なお願いをしなければいけなかったりすることもあった。

進行状況の把握に関しては、多くの人と関わって制作する場合、俯瞰して、自分の言葉で相手に自分の想像の全てが伝わっていると思いつぎないことの必要性を学んだ。何度もイメージのすり合わせをし、現状把握を繰り返すことが重要で、想像と違うものが返ってきた時は自分自身の中で伝え方をよりブラッシュアップする必要がある。脚本においては詳細を書き込むことが自分のイメージを伝えることにつながるが、(セリフを全くなくするなど)キャストの自由な演技を引き出す方が自然になる場合もあることがわかった。

またスケジュール管理に関しては、多くの人数が関わってくる場合、無理なスケジュールを組むと、天候・体調などによるやむを得ない急な変更に対応しにくい。柔軟に対応できるようにパターンを考え、スケジュールにおいても予備日を作っておく必要がある。更にタイトなスケジュールは演出に時間をかけられず表現の質が落ちる。時間をかけてとったカットは画角や画質、音楽、演技の質が良かったが、出演者の拘束時間などに余裕のなかったカットは粗が目立つ。

心情の変化に関しては、出演者の表情演技や音楽に頼り過ぎてしまった面があった。より多様な演出方法を模索していく必要があると考えた。

また映像はわかりやすさが全てではないが余白がなさすぎると理解が追いつけなくなることもわかった。内容が怒涛の展開すぎるので、状況の理解が追いつくようにもっと会話のない時間を増やし、ブラッシュアップしていきたいと考えた。

映画自体は視聴者に自分自身の人付き合いを省みるきっかけになれたのではないかと考えている。アンケートの感想では「コミュニティのあり方を観た人に問いかけようとしている作品だったと思います。問いかけてくれてありがとうございます。」という言葉を受けました。

以上が制作を振り返っての反省である。

7.2 人付き合いに関する気づき

制作を通して人付き合いについて気づいたことも多かった。

特にアンケートで頻出していた「当たり障りのない話」という言葉が印象に残っている。私自身は「当たり障りのない話」が苦手なのではないかと考えた。何がその人にとって当たり障りのない話なのか、何が踏み込んだ話なのかを、その人の立場、背景、表情や反応に注意しながら、関係を作っていく必要があると感じた。特に札幌や都会で長く過ごしている人は他人に頼るということに苦手意識があるように感じた。聞く姿勢を大切に、踏み込み過ぎず、相手を見極めていくことが肝心である。

また、話し相手からされた話題が自分にとって当たり障りのない話であっても、相手にとっては踏み込んだ話の場合もあり、その話題を別の誰かにする場合はよく考えることが重要である。

踏み込んだ話は初対面の人にしたい人もいれば、深い関係の人にしたい人もいる。私自身が自分のことを他人に話すことは、抵抗はないので、相手も自分をさらけ出してくれるか否かで距離の計り方を考えていったら良いのではないかと考えた。

しかし、自分をさらけ出した結果、仁木町などの小さな町では一度ついてしまったイメージや関係性が更新されない場合がある。また、長い付き合いがあつたとしても、さまざまな理由で疎遠になる瞬間はこれからも訪れる。過去に疎遠になった人には、その時の自分が残した印象がまだ変わらないままである。その後の自分の経緯を知らない人から見れば、現在の自分とのギャップが理解されにくいこともある。そのような過去の自分を知っている人が抱く私に対する先入観と、現在の自分には大きな違いがあることを理解し、お互いを尊重して接していくことが重要だと考えた。

以上が本研究を通して、私自身が得た、人付き合いに関する気づきである。

第8章 おわりに

8.1 謝辞

本制作にあたり、指導していただいた須之内元洋先生、本制作に挑戦するにあたっての知見をいただいた他の先生、ゼミ仲間、助監督を務めていただいた辻山姫子さんをはじめとした映画制作や展示制作にお手伝いいただいた後輩の皆さん、主演を演じていただいた土井香寧さんをはじめとした演者の皆さん、上映会開催に向けサポート頂いた札幌市立大学職員の皆さんと仁木町役場職員の皆さん、各上映会・座談会にご参加いただいた参加者の皆さんに深い感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 新明解国語辞典第7版 出版：三省堂 発行：2011年
- 2) 西村雄一郎「黒澤明 音と映像」p63 出版：立風書房 発行：1998年

参考文献

- 1) 島はぼくらと」辻村深月著／講談社出版／2013年
- 2) 映画「DOG VILLE」2003年／lars von trier 監督・脚本
- 3) サントリーの愛鳥活動 <https://www.suntory.co.jp/eco/birds/>
最終閲覧日 11月20日

Appendix

- 1) 制作した作品 映画「壁のない町」
[映画「壁のない町」本編.mp4](#)
- 2) 制作した脚本
[2011045_鹿内ひかる_脚本.pdf](#)
- 3) 座談会の議事録
[2011045_鹿内ひかる_上映会議事録.pdf](#)